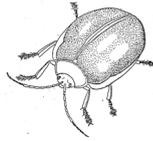


たんぽう



兵庫県におけるモンキセダカマルカスミカメの記録

宇野宏樹

モンキセダカマルカスミカメ *Pachylygus luteonotatus* は栃木県日光市菖蒲ヶ浜を基産地として発表されたカスミカメムシの1種で、ハリギリ *Kalopanax septemlobus* の葉から得られたことが報告されている(安永, 2016; Yasunaga & Schwartz, 2016). 本種は、2018年には宮崎県でも記録された(小松, 2018). 筆者は本種を記録が多くないと思われる兵庫県で得ているので報告したい。

2exs(図1・図2), 兵庫県美方郡香美町付近 三川山. 18. VI. 2016. 筆者採集保管.

これらの個体は、ゼフィルス採集のため同山を訪れた際、樹種不明のスイーピングにより得たものである。なお、前述のとおりこれらの個体を採集した樹種は記録していないが、三川山を含む北但馬地域のあたりにはハリギリが生えていることが確認されており(清水・矢野, 2001), これらの個体は採集地付近、または採集地付近からそう遠くはない場所で発生した可能性が考えられる。6月~7月にかけてハリギリ等のスイーピングを行えば、兵庫県内外の別の地域からも本種が新しく発見される可能性はあると思われ、今後の調査に期待したい。末筆ながら、採集に同行して下さった有馬 聡氏, 大畑勇統氏, 船橋智輝氏に厚くお礼申し上げます。



図1 兵庫県三川山産モンキセダカマルカスミカメ. 図2 同一産地の別個体.

○参考文献

小松孝寛, 2018. モンキセダカマルカスミカメの宮崎県からの記録. *Rostria*. 62 :53-54.

清水寛厚・矢野孝雄, 2001. 兵庫県北但馬地域における低位ブナ林とその存立条件. 鳥取大学教育地域科学部紀要. 地域研究. 3 (1): 111-131.

Tomohide Yasunaga & Michael D. Schwartz, 2016. Review of the mirine plant bug genus *Pachylygus* (Heteroptera: Miridae: Mirinae), with description of a new species from Japan. *Tijdschrift voor Entomologie*. 159: 197-207

安永智秀, 2016. カスミカメムシ類5種の和名と学名. *Rostria*.60: 31-32.

(Hiroki UNO 兵庫県宝塚市)

ウラナミジャノメによるケネザサ葉上での吸汁と雨露の吸汁を観察

島崎正美・島崎能子

筆者らは加古川市とその近郊に生息する希少チョウ類の保全ボランティア団体「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」の一員として2008年からヒメヒカゲ(絶滅危惧ⅠB類)の発生状況と生態観察の継続調査を進める過程でウラナミジャノメ (*Ypthima multistriata nipponica* 絶滅危惧Ⅱ類: 以下本種)の生態観察も継続している。それでも、生息地で日中の時間帯すべてで見続けることは出来ていなく、例えばアゲハチョウやモンシロチョウなどで頻度高く観察できるいろんな花での吸蜜など、必ず実施されているはずの生命維持のための栄養成分や水分の補給が、どのような時間帯にどのような形でなされているのか、特に本種はヒメヒカゲに比べて相対的に個体数が少ないこともあってほとんど明らかにできていない。

生態観察を開始して13年目となる2021年によく本種がイヌツゲとノイバラの花で吸蜜している場面の観察記録がとれて報告(島崎, 2021)をしたが、ヒメヒカゲで観察記録(島崎, 2013)のある朝露や路面での吸汁を本種もしているに違はなく、高い関心事として粘り強く観察を続けてきた。その結果、初めてケネザサの葉上で確実に口吻を伸ばして何かを吸汁するメスの観察記録がとれ、さらに、雨が一時的に止んだ午後に草葉に雨露が残る草むらへと踏み込み、雨露に口吻を伸ばすメス(転飛後の開翅で確認)の挙動も観察できたので報告する。

[事例 1: ケネザサの葉上で吸汁]

観察日時: 2022 年 6 月 3 日 15 時 25 分頃

観察場所: 加古川市平荘町 (図 1, 2)

(Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

(Yoshiko SHIMAZAKI 兵庫県高砂市)

[事例 2: 雨露を吸汁]

観察日時: 2022 年 6 月 6 日 15 時 10 分頃

観察場所: 加古川市平荘町 (図 3)

ヒメヒカゲに関しては路面の湿り気や鳥糞に対する吸汁(島崎, 2013), およびケネザサ葉上での吸汁例を報告(島崎, 2021)しているが, 本種が花蜜以外の雨露などを吸汁する場面の観察は, 筆者らが知る限り加古川地域では今回の事例が初めての記録となる. 前述したヒメヒカゲなどの発生状況調査は多くの場合午前の時間帯に集中しており, 今回は調査にあまり時間をかけていない午後の時間帯が栄養や水分の補給に充てられている可能性を考えた. また, 朝露のある時間帯の観察時間がとりにくいことから, あえて雨降りの合間に生息地を訪ずれる機会を待ち, 特に午後の時間帯での観察機会を増やして, 確実な映像記録をとることができた.

なお, 興味ある 6 月 6 日の観察例を追記しておく. 雨露がたくさん残るケネザサの葉上で翅の開閉を繰り返しながら 2 分近くもとどまる本種(図 4)に注目し, 雨露の吸汁を期待したが一度も口吻を伸ばすことなく飛び去った事例である. 誰がみても吸汁目的で飛んできたと思ってしまう状況であり, 朝からの降雨で吸汁の機会が十分あってすでに堪能していたとしか考えられない意外な挙動であった.

今回の事例を観察できたヒメヒカゲや本種が生息する場所は無断立入りが許されない私有地であって, 「加古川の里山・ギフチョウ・ネット」では地主さんたちの協力を得て, 草原への導入路入り口に動植物の採集をしないようにとの立て看板も設置している. 絶滅危惧Ⅱ類のウラギンスジヒョウモンも生息する貴重な自然が残るところであり, 身勝手な採集は厳に慎んでいただきたい. 2015 年には太陽光発電装置の設営で生息地の多くの部分が自然環境を失っており, 全国的にも貴重な生息地の環境保全維持活動は今後も欠かせない重要案件である.

○参考文献

- 島崎正美, 2013, ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus arothius* に関する観察記録-2. やどりが, (237): 33-40
 島崎正美, 島崎能子, 2021, ウラナミジャノメがイヌツゲとノイバラの花で吸蜜. きべりはむし, 44(2): 55-56
 島崎正美, 島崎能子, 2021, ヒメヒカゲによる吸汁とイヌツゲでの吸蜜事例. きべりはむし, 44(2): 57



図 1 2022 年 6 月 3 日 ケネザサの葉上で吸汁するウラナミジャノメ.



図 2 開翅してはじめてメスだとわかる.



図 3 2022 年 6 月 6 日 雨露を吸汁するウラナミジャノメ.



図 4 2022 年 6 月 6 日 雨露を吸汁しないウラナミジャノメ.